

## 昭和二十年三月十日の大空襲の悲劇

堀込在住 石川テツ 八五歳

あの悲惨だった昭和時代の戦争を振り返ると、戦争を体験した私としては、二度と繰り返してはいけない過ちだと思います。

昭和二十年三月十日の夜中寝静まった頃、空襲警報のサイレンがブーブーと大きく鳴り渡り、飛び起きて防空服に身を固め、寒空に外へ出ました。空を見上げると、アメリカのB29爆撃機が編隊を組んで浅草方面の上空から、焼夷弾と爆弾を花火のように落としながらこちらに向って飛んで来ました。寒さと恐さで歯がガチガチ震えました。夜空は一面赤く焼え上る炎で染まっていました。

道路は逃げる人たちでいっぱい。千住新橋の橋の下も、火の粉を避けて逃げてきた人々でいっぱい。

暗闇のざわめきを掻き分け、母親らしき人が『お医者さんは居ませんかあ：子供が火傷をしたんです。お願いします、お願いします。』と叫んでいました。

あくる日、小学校の講堂で横たわっていた少年は、顔が腫

れ唇をかすかに動かして、『大丈夫』と言って息を引き取りました。その足元で少年の母親が泣きくずれていました。お医者さんを探していたのは、近所のガキ大将達ちゃんのかあさんだったのです。

その夜のB29爆撃機編隊の無差別の焼夷弾と爆弾の投下により、たくさんの人が火の粉を浴びて逃げまどい、熱さに耐えかねて隅田川へ言問橋から飛び込み溺れ死にました。死体が男女子供、一面に浮いていて、尾竹橋の欄干から見た光景は地獄図として脳裏から消えないのです。

戦争くらい残酷なことはないと思い、平和がいい平和がいいと思うようになりました。

昭和三十年、私は夫と結婚し、三月十日の東京大空襲の夜まで台東区馬道に住み、以後行方不明になっている夫の母と弟の遺骨探しに尋ね歩き、消息を調べました。

東京大空襲記念館の記録を見て、行方不明者の遺骨が収容されている関東大震災記念堂（現「東京都慰霊堂」）の裏手の倉庫の中に二百体入る壺が棚にずらりと並んだままでした。この壺の中に義母と弟がいると思うと、悲しみと許せな

い気持ちです。

毎年三月十日は浅草公会堂の一階で東京大空襲資料展が  
地元町会ぐるみで開かれます。

\*註「東京都慰霊堂」

東京都慰霊堂は、当初関東大震災による遭難者約五万八千人  
の遺骨を納める霊堂として、被服廠跡に「震災記念堂」とし  
て建立された。戦後、東京大空襲の犠牲者約十萬八千人の遺  
骨も併せて奉安され、昭和二十六年九月に「東京都慰霊堂」  
と改称された。